

岡橋 典子 (川崎医科大学附属病院循環器内科)

【留学先】Emory University School of Medicine

【テーマ】リアルタイム 3 次元心エコー図を用いた心臓弁膜症手術の 3 次元形態学的検討

【経過報告書】

私は、2007 年 9 月から米国ジョージア州アトランタにあるエモリー大学循環器内科の心血管画像部門に留学させていただいております。エモリー大学はアトランタの北東部に広大な敷地を有する歴史ある大学で、ダウンタウンから車で 15 分足らずの距離ながら、深い緑に包まれ、静かで落ち着いたとても良い環境にあります。そのエモリー大学の中心にエモリー大学医学部と大学付属病院があり、わたしは、大学病院内の ECHO/VASCULAR Lab にリサーチフェローとして所属し、Dr. Randolph P. Martin らとともに、三次元心エコー図を用いた心臓弁膜症に関する三次元形態の解析を行っています。ラボの規模は、比較的こぢんまりとしていてアットホームな雰囲気です。南部気質も手伝ってか、みな気さくで、非常に動きやすく、日本では私自身経験のなかった経カテーテル的大動脈弁置換術や僧房弁形成術、ASD 閉鎖術などの術中評価にも立会うことができ、すべてが新しく刺激的な毎日です。また、主にフェロー教育を目的として行われるモーニングカンファレンス・ケーススタディでは、日々のエコーリーディングとともに、専門知識のみならず、臨床の現場に役立つ循環器一般知識・経験を得ることができ、大変勉強になります。また、実際の現場で働く多くのフェローと交流ができるという意味においても、とても興味深く楽しく参加させていただいております。最後になりましたが、このような素晴らしい環境で臨床研究に従事できますことを深く感謝し、ご支援くださった貴学会およびフィリップスメディカルシステムズ社にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。(2007 年 12 月)

【帰国報告書】

2007 年 9 月 1 日から 2008 年 9 月までの 1 年間、EMORY University Hospital の ECHO/VASCULAR Lab に留学させていただき、帰国いたしましたので御報告申し上げます。

留学先である EMORY University Hospital は、米国ジョージア州アトランタにあります。現在のアトランタは、世界最大の国際空港を有する、南部を代表する大商業都市で、コカ・コーラやデルタ航空・UPS など全米屈指の大企業や世界のニュースを 24 時間伝える CNN の本社が置かれ、ダウンタウンには、近代的なビルや巨大な会議場がひしめき合い、ビジネスタウンの覇気が満ち満ちています。一方、ダウンタウンを一歩離れると、豊かで深い森に囲まれた穏やかな田舎町の生活もでき、自然との調和のとれたとても過ごしやすい町です。また、“サザン・ホスピタリティー(Southern Hospitality)”

という言葉に代表されるように、町の人々は、気さくでおおらかで温かく、個人主義のイメージが強いアメリカにおいて、一種特異とさえ感じるほどでした。

エモリー大学は、アトランタの北東部に広大な敷地を有し、School of Medicine のほかに School of Law や Art and science, Business school など8つの School から構成されている歴史ある大学です。大学のキャンパスは、ダウンタウンから車で 15 分足らずの距離ながら、深い緑に包まれ、静かで落ち着いたとても良い環境にあります。そのキャンパスの中心にエモリー大学医学部と大学付属病院・付属研究機関があり、わたしは、大学病院内の ECHO/VASCULAR Lab にリサーチフェローとして所属し、主に、三次元心エコー図を用いた心臓弁膜症に関する三次元形態の解析を行いました。

エモリー大学病院の規模は、米国一般の州立大学に比べると比較的こじんまりとしているようでしたが、U.S. News 年次調査の Heart/Vascular 部門において、常にトップ 10 にランクされるなど、高い医療水準を誇っており、エコー室では、各分野のエキスパートが頻繁に出入りし、学生やフェローも含めた活発な discussion が繰り広げられていました。わたしは、ボスである Dr. Martin らと共に、エコー室に常駐していたわけですが、ボスをはじめとしたラボの仲間はみな、気さくで親切で、何かあるたびに声をかけられ、どこにいても違和感のない環境のおかげで、わたしは非常に動きやすく、エコー室のほかに病棟・カテ室、時には、救急外来や手術にも立ち合わせていただくなど、実際の臨床の現場を肌で感じる機会も多く、毎日が新鮮で刺激的でした。

わたしの留学開始時期とほぼ同時期に、3D経食道心エコーが導入されたこともあり、まだ使い勝手の分からない 1 症例目からほぼ全例において、検査終了後に施行医や sonographer 達と一緒に分かりやすい 3 次元画像の撮影テクニックや、三次元画像の有用性・問題点を症例ごとに検討する機会があったことは、3 次元画像を臨床現場で活かすための評価基準を考える上で大変役立つ経験でした。

研究課題の遂行にあたっては、IRBへの研究プロトコル提出や画像収集の許可などに思った以上に時間がかかり、書類手続きや情報管理の複雑化にやや悩まされましたが、留学中には、フェロー教育を目的として行われる院内外のカンファレンスやセミナーにも数多く参加させて頂き、多くの医学生・フェローやコメディカルと交流する機会があり、学術面のみならず、日米間の医療・教育システムの違いや、チーム医療のあり方、ひいては、各国の医療事情などにも話がふくらみ、非常に興味深い時間でした。EMORYで出会った友人たちは、みな、夢があり、バイタリティーにあふれ、たくさんの刺激を受けました。

このように、毎日が楽しく、安定し、有意義な留学生活が送れたことは、Dr. Martinをはじめとするラボの仲間のサポートのおかげであり、この素晴らしい出会いに感謝したいと思います。また、アメリカ留学という貴重な機会を与えて下さった吉田清先生、あたたかく送り出して下さった川崎医大循環器内科の諸先生方に心からお礼申し上げます。最後になりましたが、留学にあたり、ご支援をいただきました貴学会およびフィリッ

プスメディカルシステムズ社にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。(2008年12月)